

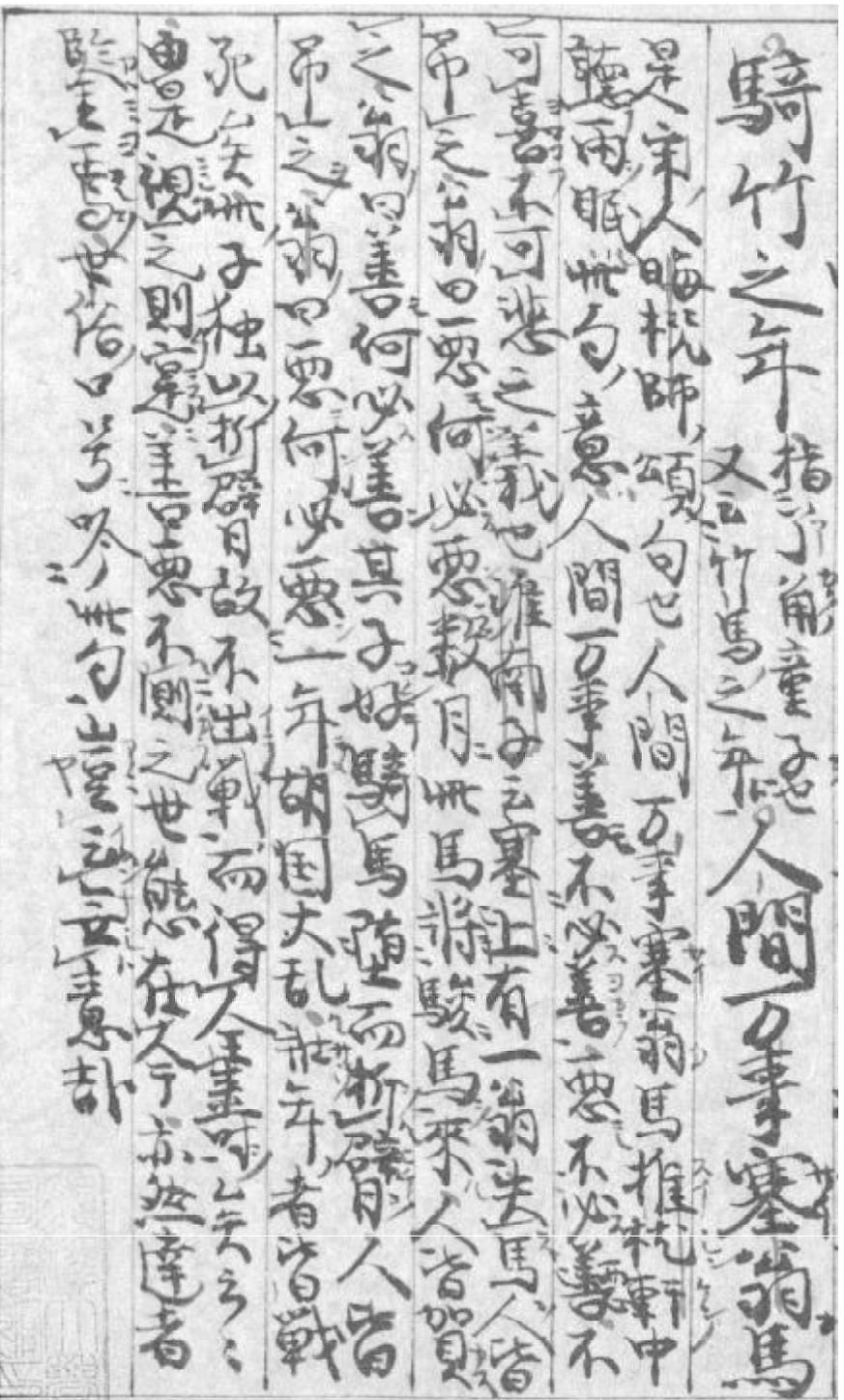
### 25の講義内容 日本語の名言慣用句

「説教」好きな日本人が語り聴く

日本人は、世界中を隈なく旅をして、諸国に言い継がれてきた「名言」を自らの国のことばとしても生かせる工夫を求めてきた。

仏教のことばに「説教」ということばや「法話」ということばがあつて、民衆に判り易く問い聞かせる。たとえば、「人のこころ」には、本来「明けの心」と「暮れの心」とがあつて、「明け」というのは「朝」のことであり、見る見るうちに明るさを増す。「誰かに……してあげたい」という報恩感謝の気持ちであるという。これに対し、「暮れ」というのは「晩」であり、あれよあれよという間に暗くなつていく。「相手に……してくれ」という相手に求頼する気持ちだという。この両極が人の心であり、「あげたい」という心のある人々の社会は、明るく澄み切った空気が漂うことであろう。これに反し、「くれ、くれ」という心ばかりが強い人々の社会は、暗くぎすぎすした揉め事を孕むということになる。この両者が丁度旨い具合に比例配分されている世界がこの日本という国では無かるうか？ 時にどちらかに比重が偏るとそこには比例配分の法則が働く。このとき我が言動に気がつくように、「名言」「慣用句」の文言が両者に亘って用意されているともいえるのではなからうか。

私は、これまで日本語に培われてきた此等の「名言」「慣用句」を用いた文学用例を集成することだけに務めてきた。その一例として、室町時代の古辞書である村口四郎蔵の『下學集』(一四四四年成)下巻の末尾部文に、「人間万事塞翁馬」という諺語が収録されていることをここに紹介しておく。



〔翻刻：元和版〕

人間萬事塞翁馬

是れ宋人晦機師ノ頌ノ句也

人間萬事塞翁馬推ニ枕ノ軒ノ頭ニ聽テ雨ヲ眠此ノ句ノ

意ハ人間萬事善モ不ニ必シ善ナラ一惡不スニ必シ惡ナラ一不スレ可レ喜ヘ不サレ可レ悲義也淮南子ニ云ク

塞上ニ有リニ一翁一失レ馬ヲ人皆吊レ之ヲ翁曰ク惡何ソ必シ惡ニ墮テ折レ臂人皆吊レ之ヲ翁曰ク惡何ソ必

人皆賀スレ之ヲ翁曰ク善何ソ必善ナラン其ノ子好騎レ馬ニ墮テ折レ臂人皆吊レ之ヲ翁曰ク惡何ソ必

シモ惡ナラム一年シテ胡國大ニ乱ル壯年ノ者ノ戰死矣此ノ子獨以テ二臂折タルヲ一不スシテ出テ戰ニ而得タリ

全スルコトヲ壽ヲ矣由テ是ニ視レ之ヲ則寔ニ善惡不スレ測世態在モ今ニ皆ナ然達者鑒レ焉ヲ世俗ノ口号ニ吟

スニ此ノ句ヲ一豈ニ云ハシヤ無シト意哉〔言辭門 157 ④〕

〔読み下し〕

人間萬事塞翁馬

是れ宋人晦機師の頌の句なり。人間萬事塞翁が馬、枕を軒の頭に推て雨を聴て眠

る。此の句の意は人間萬事善も必しも善からず。悪も必ずしも悪ならず。喜ぶべからず。悲しむべ

からざるの義なり。淮南子に云く、塞上に一翁有り。馬を失なふ。人皆之を吊らふ。翁曰く、悪何

ぞ必しも悪ならん。数月あつて此の馬駿馬を將いて来る。人皆賀す。翁が曰く善も何ぞ必しも善なら

ん。其の子好んで馬に騎る。墮て臂を折る。人皆之を吊ふ。翁が曰く、悪も何ぞ必しも悪ならん。一

年して胡國大に乱る。壯年の者の戦死すかな。此の子獨り臂折れたるを以つて戦に出でずして壽を

全することを得たりや。是に由て之を視れば則ち寔に善惡測ず。世態今に在るも皆な然り。達者

焉を鑒みよ。世俗の口号に此の句を吟ず。豈に意無しと云はんや。

『淮南子』という書物に初出される譚で、「この世のことは何事も城塞の老人の馬の譚と同じように、

何が善(幸福)の原因であり、何が悪(不幸)の原因なのかは解らない」という意味を訓戒している。こ

の根本となることながら「塞翁が馬」であり、老いた人は好むも好まないも我が人生を達観するとき

に結果から原因を遡つて眺めるのであるまいか。スポーツの試合に置き換えていえば、ゲームの最中

にきめ細かい最良の方策を練り上げるのではなく、全てが終了してから「あそこで右に展開し入れば

……」「あの時突進あるのみだったかなあ」と反省するかのようによくと尤もな方策が巡つ

てくる。だが、実際この場面場面に立ち向かう若い人にとって、老人のように結果から原因をより、

原因から結果へと展望する側にはちと、この「塞翁が馬」ではきつかるう。最善の策は何か？一番手

つ取り早く合理性に富んだ方法を選択することになってしまふ。何が最善の策かわからない、解らな

いでは済まされまいからだ。若者たるや、その場に順応適応した動きあるのみではあるまいか。年老

いてこそ響く名言がこの「塞翁が馬」ではないかと思いを馳せていると、この逆はどう箴言すべきか

問いたくも成らう。

《課題》言葉の泉に集成した「ことわざ集」[http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/ko\\_kotojiten.pdf](http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/ko_kotojiten.pdf) を参

照にして、ご自身の名言慣用句の表現を現代風に投影しながら考察してみても如何なるものであろう。

〔例文〕読売新聞「編集手帳」〔2008.12.11付〕より

舟から剣を川に落としたりした男がいる。あとで捜そうと、舟べりに目印の刻みをつけた。岸について、

刻みを頼りに川にもぐったが、剣は見つからなかった◆「小泉改革」を旗印に、歳出削減などの構造

改革路線を押し進めていくグループが、自民党内で相次いで動きを強めているという。中国の古典

「呂氏春秋」の伝える故事を思い浮かべた◆麻生内閣から民心が離れつつあるのを受け、人気の高か

った小泉政権の成功体験をもう一度、というのだろう。「時」の川は流れ、当時とは景況が一変して

いる。病床で読経を聞いているような違和感を覚えぬでもない◆工具箱に「小泉改革」という金づち

しかなければ、ノミが必要なときも、鉋かんが必要なときも、金づちを振り回すしかない。かつては自慢の道具であったにせよ、いま叩たたけばトン、チン、カンと音の出そうな金づちは、党の工具箱の中身が貧弱であることを世に知らしめるだけだろう◆職を失い、路頭に迷う人々の、溺おぼれかけた川がある。その濁流から目をそむけ、何年か前に舟べりに刻んだ“自民圧勝”の目印に頼ったところで、なくした剣は見つかるまい。